



——沢水さんはデザイン、版画と経験されておられますが

「本当は、ある1分野を極める人に憧れていましたし、自分もそうなりたいと思っていました。

でもおそらく私は好奇心を1点に集中できない性格で、思い切って構想設計*を専攻してからは、かなり自由な気持ちでいろんなことに取り組むことが出来るようになりました。」

*構想設計とは：いままでの芸術が関わってこなかった様々な今現在の問題に、多様な手法でアプローチすることを勉強する専攻です。

——制作するうえで影響を受けたものは何ですか

「構想設計専攻にいと、芸術に限らずあらゆるジャンルに接する機会があり、多方向からの影響を受けたように思います。

それと同時に、もっと身近な日常生活も大事に考えています。

「ものづくり」の原点は、美術館やギャラリーではなく、生活の中にあると思うので。」

——「ワクワク」する時とは、とても創造的な想像が頭の中で浮かび上がっているときだとおもいますが、そのためには作品において何が重要だと思われませんか。

「これに関しては、まだ決定的な答えを出すことは出来ないのですが、最近思ったのは、作ったもので豪快に遊んでしまうことが1つです。

作品を作品として大事にしまっておくのではなく、自分たちや子どもたちに思いっきり手を加えてもらったり、遊んでもらうことで、自然と汚れたり壊れたりしていくのがいいなと思います。

大事にしなきゃいけないと思うとそっと扱ってしまうけど、オモチャなら遊んでなんぼですよ。そういうイメージで、これで自由に遊んでいいんだ！と思ってもらえると、ワクワク

ワクワクする気持ちが出てくる気がします。」

——小学校でのレジデンス*ではどのようなことをされているのですか？

普段は、小学生と教室に置いてあるカヌーで遊んだり、カヌーの塗り絵の紙に絵を描いたりしています。

6月末から小学校で出来る範囲で教室で実際にカヌー制作をして、7月には船体へのお絵描きワークショップを開催、8月には小学校のプールに出来上がったカヌーを浮かべます

*レジデンスとは：ある場所に招かれるなどして滞在し、作品制作をすること。

——沢水さんは水口泰自郎さんと木製カヌー制作グループ「Penguin Paddles」をされていらっしゃるようですが、「Penguin Paddles」に込められた意味など教えてください。

「カヌーに初めて乗ったとき、魚になったような気分と同時に鳥になったような気分にもなりました。

船体が低いカヌーは水面ギリギリの海と空の境界線を体感できる乗り物だと思ったんです。

魚と鳥の中間的なものをイメージした時に思いついたのがペンギンでした。

そして共同で制作を始め、これから多くの人と関わっていきたいという思いからパドル（カヌーを漕ぐ櫂）は複数形にしています」

——今後の展望をお教えてください。

「今やっていることを長期的に続けて、人生そのものになればいいなと思います。

なにかきっかけがあって、人と人と繋がって行って、大人も子どもも一緒にワクワクできるような場が作れたらいいですね。」

——お客様に一言おねがいします

「私は難しい言葉で語られる芸術が苦手です。

展覧会というと、日常から離れていろんな世界に遊びに行くことが出来る、少し非現実的な場所だと思っています。なので、単純に「ワクワク」を共有してもらえたらなと思います。」

2014.6-7月インタビューアー

京都市立芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻1年 田川莉那